

端午節と五月五日

釜谷武志

五月五日の端午節^①に、粽を食べ龍をかたどった船でボートレースを行なう風習がある。日本では長崎や相生でのレースがよく知られている。もちろんこれは中國から傳わった習慣である。^②ただ、現在日本では主に太陽曆の五月五日を端午の節句と稱しているが、長崎などのレースは、五月下旬以降、舊曆（太陰曆）の五月五日に近い時期に實施している。中國でも基本的に太陰曆（夏曆）の五月五日が端午節であって、この日の前後に行なわれている。

この風習は、この日に汨羅の淵に身を投じた屈原の靈をなぐさめるためのものであると、古くからいわれている。たとえば『荊楚歲時記』にいう。

五月五日、競渡あり。俗に屈原汨羅に投ずるの日、其の死所を傷み、竝びに舟楫に命じて以て之を拯わしむると爲す。舸舟其の輕利を取りて、之を飛鳧と謂う。一に自ら以て水軍と爲し、一に自ら以て水馬と爲す。州將及び土人、悉く水に臨みて之を觀る。^③

南朝後半において、すでに五月五日のボートレースが屈原と關連つけて考えられていたのである。また、レースではないが、この日に屈原が入水したために、その靈を祭る行事があったことは、次の『續齊諧記』にも見られる。

屈原五月五日に自ら汨羅に投じて死す。楚人之を哀れみて、此の日に至る毎に、竹筒もて米を貯え、水に投じて之を祭る。漢の建武中、長沙の歐回、白日に忽ち一人に見ゆ。自ら三閭大夫と稱して、謂いて曰く、「君富いに見を祭ること、甚だ善し。但だ常に遺る所、蛟龍に竊まるるに苦しむ。今若し恵有れば、棟樹の葉を以て其の上を塞ぎ、五綵の絲を以て之を縛る可し。此の二物は、蛟龍の憚る所也」と。回其の言に依る。世人粽を作り、苳びに五色の絲及び棟葉を帶ぶるは、皆な汨羅の遺風也。⁽⁴⁾

端午節にいわゆる粽を食する習慣について、その由来をある俗説から説明している。後漢の建武年間（二五〜五六）に、歐回なる人物が屈原と自ら名の男に出會い、水中の龍が嫌う「おうち」の葉で竹筒を包み、さらに五色の絲で縛ってほしい、でなければせつかくの筒入りの米が龍に掠め取られる、と言われた。それ以来、五月五日におうちの葉でくるみ五色の絲でくくった粽を作るようになったという。

しかしこうした風俗が必ずしも屈原と結びつくものでなかったことは、すでに聞一多が「端午考」⁽⁵⁾で考察している。その論旨のうち本稿の内容に關係するものは、次の二つにまとめられる。

(1) 端午節の起源は龍と深い關係があり、しかもそれは古代吳越の民族、龍をトーテムとしていた民族の祭日であつただらう。

(2) その民族にあつては、龍とかかわる五という數字が神聖な數であつて、それが後の五行思想に發展していった。また四方の龍の中央に位置する五番目の龍が上位に位置することで、五が神聖な數となり、端午節が五月五日に行なわれるのもその現れである。⁽⁶⁾

さて、北齊の魏收に「(五月)五日」『初學記』卷四」と題する詩がある。

麥涼殊未畢 麥涼殊に未だ畢らざるに

蜩鳴早欲聞 蜩鳴早くも聞かんと欲す

喧林尙黃鳥 林に喧しきは尙お黃鳥

浮天已白雲 天に浮かぶは已に白雲

辟兵書鬼字 辟兵 鬼字を書し

神印題靈文 神印 靈文を題す

因想蒼梧郡 因りて想う 蒼梧郡

茲日記東君 茲の日 東君を祀るを

最後の二句で、蒼梧（廣西壯族自治區）ではこの日、五月五日に東君という太陽神を祭っていたというのである。もし通常いわれるように、この日に屈原を祭る習慣が本来あったとしたら、あるいはまた聞一多のいうように、龍を祭る祭祀がもととあったとしたら、屈原や龍から變わって東君を祭るようになることは考えにくい。ことはむしろ逆ではないだろうか。

端午節に特徴的な風習が五月五日に舉行されるという點も、實は決して固定してはいないのである。先に見た『續齊諧記』と同類の言い傳えが、『荆楚歲時記』のあるテキストでは、次のように記されている。

屈原 夏至の日を以て湘流に赴く。百姓競いて食を以て之を祭るも、常に蛟龍の竊む所と爲るに苦しみ、五色の絲を以て楝葉を合わせて之を縛る。

ここでは、五月五日でなしに夏至の日に、屈原が湘水へ行き入水したという。これはなぜであろうか。屈原が五月五日に亡くなったという話以外に、もう一つ別の傳説があったことを想像させる。もしかりに當初から、五月五日に屈原の靈を慰めるためのこうした風習があったとすれば、そこから變わって夏至の日に行なわれるようになったことは想定しにくい。今日でも中國、臺灣、シンガポールそして日本において、ほとんどが五月五日を端午節として、この日を中心に競艇が行なわれ続けているのは、かかる風習が今や太陰曆の五月五日と強く結びついていることを示している。とすれば、五月五日にほぼ定まる以前の段階で夏至と結びついた風習があったと考えるべきであろう。

五月五日に屈原が汨羅に身を投じたので、毎年この日に彼の靈を祭るため、こうした俗習ができたというが、それが夏至の日であったとするもう一つの傳説も存在するのである。これは、太陽曆で夏の頂點に位置する夏至の日に、本来何らかの祭祀があった名残ではないだろうか。

二

五月五日以外に、夏至にも屈原を弔う習慣があったとされることから、夏至が特別の意味をもっていたと考えられるが、その他に五月十五日も實は重要な日であった。

ここで日本に傳わる一振りの刀についての研究を見てみよう。

宮崎市定「七支刀銘文試釋」⁽⁸⁾は、奈良の石上神宮に傳來する刀について考察したものである。長さ七十五センチで、先端が七枝に分かれ、それぞれに鋒刃をもつ刀には、中央の主身に表面三十四字、裏面二十七字の金象嵌の銘文があるという。以下、宮崎氏の所説の一部を簡単に引用する。氏によれば、銘文に次のような表現がある。

泰【始】四年五月十六日丙午正陽……造百練鐵七支刀【巨】辟百兵。

まず「泰【始】四年五月十六日丙午正陽」であるが、なぜこの日付になっているのか。そもそも銅鏡の銘文には、「五月十五日」が多いという。しかもそれは實際の日付ではなく、「縁起のよい日付を選ぶのが常であり、五月は夏の中旬、十五日はその五月の中日なのである。鑄造には火熱を利用するので、時期としては火勢の旺なる夏三月の中でも、最も火勢の強き日として五月十五日の日付を用いるのである」。

ここで「五月十五日」ではなく「十六日」となっていることに着目し、かねてより諸説があった「泰始四年」をどの年に比定するかの問題に對し、逆に大きな決め手とするのである。五月十六日が夏三か月の中間に來る可能性は、四月・五月・六月がそれぞれ小・大・大の月になる場合のみで、それは「泰始四年」や「太始四年」などの中で、劉宋・明帝の四六八年が唯一該當する。刀はこの年に制作されたと宮崎氏は推測するのである。

「丙午正陽」も常用される「吉祥の文句であり、丙午は日の干支のうち最も火勢の旺なる日で、必ずしも五月十六日の實際の干支でなくても構わない。正陽は正午と同じく太陽が南中する時間の意味である」と氏は述べる。

「丙午」の「丙」は「ひのえ（火の兄）」で、「ひのと（火の弟）」の「丁」とともに五行の「火」に屬し、しかも「丁」よりも力が強い。また「午」は十二支の七番目で、方位としては南に位置し、これも五行では「火」に相當する。日本で「丙午」年生まれの女性を強すぎるとして敬遠する俗信ゆえに、この干支に當たる一九六六年の出生率が目立って低かったことは、今なお記憶に新しい。

また「造百練鐵七支刀【巨】辟百兵」の銘文も注目すべきである。「辟百兵」は先に挙げた魏收「五月」五日「詩の第五句「辟兵」と酷似している。宮崎氏は「百兵はあらゆる武器、辟は避と同じ。刀槍も身體に害を加えることが出來ぬの意」と解釋する。厄拂いの効果があることをいうのだろう。この太刀の場合は「五月十六日」で、まさに「十六日」であったことが、制作年代の判定に大きく寄與したわけだが、通常は「五月十五日」と刻銘されている。そして、この日が大きな意味をもつのは、まさしく夏の真ん中、頂點に位置するからである。つまり五月の中間の日は、

夏の間でもあり、火力が最も強い日と信じられ、人間の身體を護るのに效用があると考えられていたのだ。

ところが、これと似た内容でありながら、五月十五日ではなく、五月五日に繋げる記述がある。『抱朴子』雜應篇にいう。

或るひと辟五兵の道を問う。抱朴子答えて曰く「……或いは五月五日を以て赤靈符を作り、心の前に著け、或いは丙午の日の日中時に、燕君龍虎三囊符を作る。歳符は歳ごとに之を易え、月符は月ごとに之を易え、日符は日ごとに之を易う。或いは西王母兵信の符を佩び、或いは熒惑朱雀の符を佩び、或いは南極鑠金の符を佩び、或いは却刃の符、祝融の符を戴く。……今の世の人、亦た禁辟五兵の道を得る有り、往往に之有り」と。

「辟百兵」ではなく「辟五兵」ではあるが、内容としては同様で、どんな武器をも退けることのできる方法の意であろう。それが五月五日と結びつけられている。五月五日は護身に効果のある、何らかの力が関係すると考えられていたのだろう。また、「丙午の日の日中」も見える。これは先の宮崎氏の論文にあった「丙午正陽」に相當する。次の『抱朴子』登涉篇の例も「五月丙午日中」で、同じことである。

或るひと「江を涉り海を渡るに蛇龍を辟くるの道」を問う。抱朴子曰く「道士已むを得ずして當に大川を游涉すべき者は、皆な先ず當に水次に於いて、鷄子一枚を破り……。又た『金簡記』に云う『五月丙午の日の日中を以て、五石を擣し、其の銅を下せ』と。五石なる者は、雄黄・丹砂・雌黄・礬石・曾青也。……之を帯びて以て水行すれば、則ち蛟龍巨魚水神も敢えて人に近づかざる也」と。

どうやら五月丙午の日、五月五日そして五月十五日は、共通項をもっていたのである。同様の例をもう少し挙げてみよう。應劭『風俗通』（『藝文類聚』卷四所引）に、

五月五日、五綵の絲を以て臂に繫ぐ、長命縷と名づく、一に辟兵繒と名づけ、一に五色縷と名づけ、一に朱策と名づけ、兵及び鬼を辟け、人をして瘟を病まざらしむ。

とあり、五月五日に五色の絲で腕をつなぐと、武器や鬼神の害を避けることができ、病氣にならないという。ところが、『太平御覽』卷二三に引く『風俗通』では、

夏至に五綵を著け兵を辟く、題して「游光」と曰う、厲鬼なり、其の名を知る者温疾無し。五綵、五兵を辟くれば也。¹²
とあって、ほぼ同様の内容が後者では、「五月五日」でなしに「夏至」になっている。

また『荆楚歳時記』には、「夏至節の日に、粽を食す」（夏至節日、食粽）という。五月五日ではなく、夏至の日に粽を食べる習慣があつて、五月五日・五月十五日・夏至のもつ性格が共通していることは、ここからも確かめられよう。

太陰暦の五月五日もしくは五月十五日の頃は、太陽暦ではおおよそ六月中・下旬あたりになることが多く、とりわけ中國南方では病氣が流行する時期でもある。

『大戴禮』卷二「夏小正」に「五月、……蘭を蓄えて沐浴を爲す也」、「夏小正」(『太平御覽』卷三二)に「(五月)此の月に薬を蓄え、毒氣を蠲除する也」といい、『荆楚歳時記』に「五月五日、之を浴蘭節と謂う。四民竝びに百草を踏むの戲あり。艾を採りて以て人がたを爲り、門戸の上に懸けて、以て毒氣を禳う。菖蒲を以て或いは鏤み或いは屑とし以て酒に浮かぶ」などという。蘭や菖蒲といった香草を用いて沐浴したり、酒に浮かべて飲むのは、實際にこうしたものの殺菌作用を利用したにちがいない。

また、それが邪鬼や疫病を拂禳するシンボルとなり、菖蒲や艾よもぎを門に挿すようになったのではあるまいか。蘭は次に舉例するように『楚辭』にも見られるから、昔から楚の祭祀で、蘭を使っていたことも大いに考えられよう。

瑤席兮玉瑱 盍將把兮瓊芳 瑤席に玉の瑱あり 盍して瓊芳を將把す

蕙肴蒸蘭藉 奠佳酒兮椒漿 蕙肴蒸して蘭藉かれ 佳酒と椒漿を奠す (『楚辭』九歌・東皇太一)

浴蘭湯兮沐芳 華采衣兮若英 蘭の湯に浴して芳に沐し 華采の衣と若の英 (『楚辭』九歌・雲中君)

前者では、神への供え物を載せる際に蘭草を敷いていたし、後者では、蘭を入れた湯で沐浴していたというから、香草の殺菌作用に注目して、古くから神事に用いていたのであろう。それが疫病が最も蔓延しやすい時期に用いられているのは、香りという人間の五感で一番原始的な性格の感官である嗅覺に関わる點と、殺菌作用という實際的效用面との雙方において裏付けをもっていて、單に象徴的な意味にとどまらない。¹³

では、聞一多のいう龍との関係については、どう考えればよいのか。

『春秋繁露』にいう、

丙丁の日を以て、大赤龍を爲ること一、長け七丈、中央に居らしむ。又た小龍を爲ること六、長け各おの三丈五尺、南方に於いて皆な南郷せしむ。其の間相い去ること七尺、壯者七人ありて、皆な齋すること三日、赤衣を服して之を舞う。司空齋夫も亦た齋すること三日、赤衣を服して之を立つ。鑿ちて之を閭外の溝と通ぜしめ、五蝦蟇を取り、里社の中に錯置す。池は方七尺、深さ一尺、酒膊祝齋、赤衣を衣て、拜跪し、祝を陳ぶること初めの如くす。⁽¹⁾

ここには明らかに五行思想がうかがえる。五行の「火」に配置される「丙丁」があり、「赤」い龍、「南方」の語が見えて、夏と連結されている。確かに龍と「丙」「夏」との関係が見られるが、これをふまえた次の『論衡』にも、五月丙午日中の語がある。

董仲舒は春秋の雩を申べて、土龍を設け以て雨を招く、其の意は雲龍相致すを以てす。……陽燧は火を天より取るに、五月丙午日中の時、五石を消煉し、鑄して以て器と爲し、乃ち能く火を得。今妄りに刀劍偃月の鉤を取りて、摩して以て日に向かわしむるも、亦た能く天を感ぜしむ。夫れ土龍は既に陽燧に比ぶるを得ざれば、當に刀劍偃月鉤と比ぶるを爲すべし。⁽²⁾

五月丙午日中の時、すなわち夏の陽の氣が最大に達した時に鑄造した器物は、最も火の力が強い時であるがゆえに「火」をとらえることができるとする。先に見た七支刀の銘文と共通する。そして、ここに見えるところの、土龍で雨を招く行爲が、龍と「夏」との関係でいえば、むしろより古い形態ではないだろうか。事實、それは現實生活面での裏付けがある。太陽暦での三月以降は降雨が少なく、農作物の生育に甚大な影響が及ぶ。たとえば『後漢書』禮儀志に、「雩の禮を行ないて、雨を求め、諸陽を閉じて、白を衣、土龍を興す」というように、土龍を造って「土」と関連する黒い衣服を着用して降雨を祈禱している。

これがとりわけ夏の時季に必要とされることは、次の『宋書』五行志の例を見ればすぐに理解できよう。

晉の穆帝の永和元年五月旱あり。有司奏すらく、「董仲舒の術に依りて、市を徙し、水門を開き、謁者を遣りて太社に祭らしめ」と。

五月に旱害があつて降雨を祈禱する祭祀を行なっている。太陰曆の五月から夏至の時期に降雨が必要なことは明らかであり、龍をかたどった船での競漕が端午節と結びついて行なわれるのは、その起源がどこにあるのかは明確にしがたいものの、この時季に雨を必要とすることと大いに關係がある。

『隋唐嘉話』下に、

俗に五月五日に競渡の戲を爲す。襄州自り已南、向る所相い傳えて云う、屈原初めて江に沈むの時、其の郷人舟に乗りて之を求む。意急にして前を争う、後因りて此の戲を爲す、と。

とあるのによると、襄州以南でボートレースと屈原を結びつけた言い傳えが盛んであった。また同様の話は『隋書』地理志下にも見える。

大抵荊州は率ね鬼を敬い、尤も祠祀の事を重んず。昔屈原九歌を爲制りしは、蓋し此れに由る也。屈原五月望日を以て汨羅に赴き、土人追いて洞庭に至るも見えず。湖大にして船小、濟るを得る者莫し。乃ち歌いて曰く、「何に由りて湖を渡るを得ん」。爾るに因りて櫂を鼓して歸るを争い、亭の上に會するを競う。習いて以て相い傳え、競渡の戲を爲す。其れ楫を迅くし齊しく馳せ、櫂歌亂響し、水陸に喧振し、觀る者雲の如し。諸郡率ね然るも、南郡、襄陽尤も甚し。

ここでは五月望日、すなわち十五日に屈原が入水したとの傳説が記されており、五月五日や夏至ではないことがわれわれの注意を引くが、それもさることながら、南郡、襄陽を主とする諸郡、換言すれば長江中流域でボートレースが盛んであったと記述している。とすると、ボートレースが古代吳越民族に由來するとの考えは成立しにくいだろう。もし聞一多のいうごとく、長江下流域に位置する吳越の民族に起源を有するとすれば、なぜ隋唐期に下流域でなく中流域で盛大であったかがうまく説明できないからである。むしろ、もともと中流域である楚地方で祭祀があつて、その流れが連綿と續いていると考えるべきではあるまいか。

『唐摭言』に載せる話によれば、宜州の盧肇が科擧に首席合格した後、故郷にもどつた際に州の長官から「競渡」見物に招かれたというのも、晩唐のころ長江中流域でおそらく夏にボートレースが行なわれていたことを示す。

なお唐詩の中にはボートレースにふれたものがいくつもある。そこからうかがえるのは、宮中の興慶池でも催されていたこと（これは必ずしも端午節の日とは限らないようである）、もとの楚を中心とする長江の中流域が多く、昔の越に相當する浙江省での詩も傳わっていること、レースそのものは春秋に行なわれていたことなどである。たとえば、張説「岳州觀競渡」には「土尚三閭俗、江傳二女遊」の二句が見え、屈原とともに湘君・湘夫人にまつわる傳説との關連をうかがわせる。劉禹錫「競渡曲」では、五月に沅江で行なわれていたレースが、武陵に起源を發すると言いつづられてきたこと、屈原を招き寄せるために「何くにか在る」と皆で唱和すること、川べりに招屈亭なるものがあつたことなどをいう。元贇「競舟」からは楚の風俗としてレースが非常に盛んであつたこと、楚のいくつかの州でみられること、毎年四五月に準備も含めて數十日かけて行なわれたことが知られる。また張建封「競渡曲」は五月五日に舉行されるレースを事細かに描寫する。⁽²⁰⁾

あるいは長江中流域の楚地方に、もともと龍と關係のある祭祀があつたのかもしれない。そういえば『楚辭』に「飛龍」の語がある。『楚辭』九歌・湘君に、

望夫君兮未來 吹參差兮誰思 夫の君を望むも未だ來たらず 參差を吹きて誰をか思わん

駕飛龍兮北征 遭吾道兮洞庭 飛龍に駕して北に征き、吾が道を洞庭に遶らす

……

……

石瀨兮淺淺 飛龍兮翩翩

石瀨は淺淺とし 飛龍は翩翩たり

と見えるのは、「九歌」が楚の祭祀で用いられた可能性が大きいことを勘案すると、祭りの場において、龍をかたどった舟で水神を追跡していた可能性もある。それが龍船での競漕に影を落としていることも大いに考えられる。

四

以上のことから、端午節あるいはその起源に近いものは、もともと夏至の日か、それに近接した日になることが多い太陰曆の五月十五日に行なわれていた祭祀であつたと推測できる。それが後に五月五日に變つて、固定したのであろう。必ずしもすべてが五月五日に移行して固定したわけではなく、夏至や五月十五日に舉行されている例があるのは、その名残と考えられる。⁽²¹⁾

夏至から移行した理由として考えられるのは、基本的に太陰曆を主としている中國では、太陽曆の夏至が毎年何月何日に相當するかが一定せず、祭祀の實施に不便を來たしたであろうことである。五月十五日などから五月五日に固定したのは、誰しもが思いつくように、要するに記憶にとどめやすいからだろう。同じく陽數を重ねた三月三日に、上巳節が移って固定したことを想起すればよい。「蘭亭序」で有名な上巳節は、その名の通り元來は三月最初の巳の日に施行されていた。それが三日に固定するのは、後漢から魏晉にかけてのことと思われる。夏至（陽曆での陽の頂點）や、五月十五日（陰曆での陽の頂點）にあった祭祀が、徐々に五月五日に移って固定していったのであろう。⁽²⁾

夏至と對になる冬至も特異な日である。北半球ではこの日晝間の長さが一年で一番短く、南中する時の高度も最も低い。それは誰もが視覺によって明確に知ることのできる現象である。いわば太陽曆で「陰」の極致にあたる日である。ただそのことは同時に、この日を境にして「陽」が増加していくことも意味する。『周禮』大司樂にある「とく、この日に地上の圓丘で天を祭ったというのは、陽が増していく原初の日に相當するからに違いない。

冬至が中國のみならず、西洋でも古くから深い意味をもつ日であったことはよく知られている。キリストの誕生日とされる十二月二十五日は、がんらい冬至にあたる日で、太陽の誕生日たる祝祭日であった。古代ローマではこの日に、ポートルレースならぬ凱旋車のレースが盛大に行なわれていた。⁽³⁾ 中世以降も西洋では冬至祭が催されていて、それと並行して十二月二十五日にキリストの降誕祭があったのは、中國で所によって夏至に祝祭があるとともに、五月五日の端午節を祝っていたことと、同じ類型に屬しよう。

フレイザー『金枝篇』には、夏至の前後にあたる洗禮者ヨハネの祝日 (Midsummer Day) に行なわれるさまざまな風習が擧げられている。また近代ヨーロッパの夏至大祭と類似した儀式が、古代ギリシアで夏至に行なわれていたという。夏至は中國以外でも特別の意味合いを付與された日であったのだ。

試みに『太平御覽』卷三一を見ると、「五月五日」の項に收載されているのは、『大戴禮』、謝承『後漢書』、沈約『宋書』、『唐書』、『孝子傳』、『續齊諧記』、『西京雜記』、『鄴中記』、『風土記』、『抱朴子』、『風俗通』のように、後漢以降の文獻がほとんどである。これに對して、同書卷二三の「夏至」では、後漢以降の書名も多く引用されているが、『周易』、『左傳』、『周禮』、『淮南子』をはじめとして、それよりも古い資料も少なくない。このことは、五月五日の端午節が重んじられるようになったのは、夏至よりも遅く、おそらく後漢以降であったことを推測させる。

以上を要するに、もともと夏至、あるいは五月十五日という、太陽曆、太陰曆のそれぞれにおける夏の中心に位置する日に行なわれていた祭祀、

それは太陽もしくは、陰陽の陽を祭る祭祀であったのが、徐々にこれらの日と近接した五月五日に移って固定していったと考えられる。五月十五日の祭祀がいつ頃から始まるかは定かではないが、夏至に行なわれていたものの方が、十五日のよりも遙かに古いであろう。それらと深い関係にある風習が大部分の所で五日に行なわれるのは、要するに記憶に便であるからだし、五という数が陽に属すること、五と同音の「午」がちょうど夏を象徴する南の方位に相當すること、などの諸點がそれを加速させたのであろう。

注

(1) 端午節については、中村喬『中國の年中行事』(平凡社、一九八八年)の「五月端午節」に詳しい。中村氏が「端午の場合には夏至や五月に行なわれる風習行事が、午日を用いることなく五月五日に集約されたものである」(二三三頁)、「五月五日の祓禊行爲は本来夏至のためのものであった」(二三五頁)と述べられるのに基本的には同意できるが、本稿執筆の意圖はむしろそれ以外の要因やその思想的背景をさぐることにある。

なぜ「端午」というかに関しては諸説ある。周處『風土記』(『初學記』卷四)の「仲夏端午、享鶯角黍」の注に「端、始也、謂五月五日」とあるのによれば、五月の最初から五日目だから「端午」の呼稱を用いることになる。黄石『端午禮俗史』(泰興書局、一九六三年)は、『淮南子』時則訓に「孟春之月、招搖指寅」「仲春之月、招搖指卯」「季春之月、招搖指辰……、仲夏之月、招搖指午」とあるから、北斗の招搖が午を指すのは、仲夏つまり五月であることをその一説として擧げる。また端午というのは、月・日・時刻の三つがともに午を指すからとも考えられるという(八七一頁)。この場合「端」は「端正」の意である。

(2) ポートレースの風習は中國大陸から傳來したものであるが、その経路については定かでない。朴鍾祐氏の教示によれば、韓國では端午節にポートレースを行なう習慣はなく、この日には女子がブランコに乗るといふ。とすれば朝鮮半島を経由して日本に傳わったものではないだろう。また、明清時期にはこの日を女兒節とも呼んでいたから、韓國にはそれが傳わったと考えられる。

中村喬『中國の年中行事』(注1所掲)一五五頁に「日本の長崎のペーロン競漕は、この福建の形式(龍舟を指す——引用者)を傳えたもので、その名は龍舟を福建地方では爬龍(ペーロン)船というによる」とある。日本へはまず長崎に傳來しているから、それは江戸時代のことであろうか。現在臺灣でも行なわれており、大形徹氏の示教によると、シンガポールでは端午節の日に「賽龍船」と稱して、屈原の供養のために國際大會も開かれていたとのことである。

また山本達郎「競渡考」(『東洋史研究』八一、一九四三年)に「競渡は支那のみならず安南に於てもラオスに於てもカムボヂヤに於てもタイ國に於ても行はれたのであつて、……ビルマに於てもベンガル州の各地に於ても行はれマライ地方にも若干その例がある」といふ。

(3) 「五月五日、競渡。俗爲屈原投汨羅日、傷其死所、竝命舟楫以拯之。舸舟取其輕利、謂之飛鳧。一自以爲水軍、一自以爲水馬。州將及士人、悉臨水而觀之」(『太平御覽』卷三一所引)。ただ『荊楚歲時記』(守屋美都雄譯注、布目潮風他補訂、平凡社、一九七八年)は、この部分を隋の杜公瞻の注であろうとされる。

またポートレースを明確に傳えた最古の史料として南齊の劉澄之『鄱陽記』を引かれる(同書一四九―一五〇頁)。「鄱陽記」にも、五月五日の競渡が屈原と結びつけて考えられていたと記している。

(4) 「屈原五月五日自投汨羅而死。楚人哀之、每至此日、竹筒貯米、投水祭之。漢建武中、長沙歐回、白曰忽見一人。自稱三閭大夫、謂曰『君富見祭、甚善。但常

所遺、苦蛟龍所竊。今若有患、可以棟樹葉塞其上、以五綵絲縛之。此二物、蛟龍所憚也。回依其言。世人作粽、竝帶五色絲及棟葉、皆汨羅之遺風也。〔藝文類聚〕卷四所引『續齊諧記』。

(5) 『聞一多全集』「神話與詩」所收。

(6) 「我們不但可以確定前面提出的假設、說端午的起源與龍有着密切的關係、並且還可以進一步推測、說他就是古代吳越民族——一個龍圖騰民族舉行圖騰祭的節日、簡言之、一個龍的節日」(注5所揭書、二二七頁)。

(7) 「一方面龍的數既是五、所以在圖騰社會的背景之下、“五”便成爲一個神聖個數、而發展成爲支配後來數千年文化的五行思想、一方面作爲四龍之長的中央共主是第五條龍、所以“第五”便成爲一個神聖的號數、至今還流行着的五月五日的端午節、便是那觀念的一個見證」(同、二二一頁)。

(8) 『東方學』第六四輯、一九八二年。

(9) 「或問辟五兵之道。抱朴子答曰：……或以五月五日作赤靈符、著心前、或丙午日中日時、作燕君龍虎三囊符。歲符歲易之、月符月易之、日符日易之。或佩西王母兵信之符、或佩熒惑朱雀之符、或佩南極鑠金之符、或戴却刃之符、祝融之符。……今世之人、亦有得禁辟五兵之道、往往有之。」

(10) 「或問涉江渡海辟蛇龍之道。抱朴子曰：道士不得已而當游涉大川者、皆先當於水次、破鷄子一枚……又金簡記云『以五月丙午日中日中、搗五石、下其銅。五石者、雄黃・丹砂・雌黃・礬石・曾青也。……帶之以水行、則蛟龍巨魚水神不敢近人也。」

(11) 「五月五日、以五綵絲繫臂、名長命縷、一名辟兵縷、一名五色縷、一名朱策、辟兵及鬼、令人不病瘟。」

(12) 「夏至著五綵辟兵、題曰『游光』、厲鬼、知其名者無溫疾。五綵、辟五兵也。」

(13) 『端午節』(中國節日叢書、王秋桂主編、楊玉君撰稿、行政院文化建設委員會出版、一九九五年)は、ある學者の説として「端午節或許另有起源。其中一種説法是：端午節源於對惡日的禁忌。端午時值農曆五月、正是仲夏疫厲流行的季節、俗稱「惡月」と述べ、端午節の起源を夏の盛りの病氣が蔓延しやすい時期と結びつけている。また黃石『端午禮俗史』(注1所掲)は、端午節の風習の起源を拂儀に置いて解釋している。

(14) 「以丙丁日、爲大赤龍一、長七丈、居中央。又爲小龍六、長各三丈五尺、於南方皆南鄉。其間相去七尺、壯者七人、皆齋三日、服赤衣而舞之。司空喬夫亦齋三日、服赤衣而立之。鑿而通之閭外之溝、取五蝦蟇、錯置里社之中。池方七尺、深一尺、酒膊祝齋衣赤衣、拜跪、陳祝如初」(董仲舒『春秋繁露』卷一六)。

(15) 「董仲舒申春秋之書、設土龍以招雨、其意以雲龍相致。……陽燧取火於天、五月丙午日中之時、消煉五石、鑄以爲器、乃能得火。今妄取刀劍偃月之鉤、摩以向日、亦能感天。夫土龍既不得比於陽燧、當與刀劍偃月鉤爲比」(『論衡』亂龍篇)。

(16) 山本達郎「競渡考」は、ボートレースに用いる龍舟が「或はそれは元來は水の精たる龍神の姿を真似たもので、その競漕は水の神の祭であると共に雨と豊饒とを齎すべき呪術であつたのではなからうか」という。この風習は最近まで續いて、民國期に天津や安徽で、龍を作つて降雨を祈禱する習俗の遺風が残つていとされる(出石誠彦『支那神話傳説の研究(増補改訂版)』中央公論社、一九七三年、四五七頁、白鳥清「龍の形態について」『東洋學報』二二一一、一一〇〜一頁)などを参照。グラネ『中國古代の祭禮と歌謠』(平凡社、一九八九年)は、古代中國の祭禮に様々な競争があつたことを指摘する。競漕の起源とも關係があろう。

(17) 「俗五月五日爲競渡戲。自襄州已南、所向相傳云、屈原初沈江之時、其鄉人乘舟求之。意急而爭前、後因爲此戲」。

(18) 「大抵荊州率敬鬼、尤重祠祀之事。昔屈原爲制九歌、蓋由此也。屈原以五月望日赴汨羅、士人追至洞庭不見。湖大船小、莫得濟者。乃歌曰『何由得渡湖』。因爾鼓權爭饋、競會亭上。習以相傳、爲競渡之戲。其迅楫齊馳、權歌亂響、喧振水陸、觀者如雲、諸郡率然、而南郡、襄陽尤甚。」

(19) 「盧肇、袁州宜春人、與同郡黃頗齊名。頗富於產、肇幼貧乏。與頗赴舉、同日邊路、郡牧於離亭餞頗而已。時樂作酒酣、肇策蹇郵亭側而過、出郭十餘里、駐程侯頗爲侶。明年、肇狀元及第而歸、刺史已下接之、大慙恚。會延肇看競渡、於席上賦詩曰『向道是龍剛不信、果然銜得錦標歸』。《唐摭言》卷三。

(20) 中村喬『中國の年中行事』一五一頁は、宮中での競漕について、競渡は「唐代においてこれが宮中行事として取り入れられた。その記事は穆宗・敬宗の時代に限られている」というが、『全唐詩』に見える應酬作からすると、初唐期にすでに行なわれていたようだ。

(21) 『端午節』に「全國各地的端午習俗。…湖北省。黃崗縣端午節巴河鎮迎離人、花冠文身、鳴金逐疫。宜昌縣端午競渡、但以五月十三・十四・十五三日特盛。五月十五日又稱「大端陽」というように、現代でも五月十五日にボートレースが行なわれている所が少なくない。

(22) 五月五日が月・日の數を同じくして記憶に便利であるだけでなく、もともと五月五日が何か特別の意味をもった日であって、それと結びついた可能性もある。『史記』孟嘗君傳によると、孟嘗君は五月五日に生まれたために、父から生かしておくわけにはいかないといわれ、その理由について父は「五月の子なる者は、長じて戸と齊しく、將に其の父母に利あらざらん」と述べている。こゝは五月生まれの子についてであって、五月五日に限ってはいないが、『素隱』は「風俗通」の「俗説に五月五日に生まれたる子は、男は父を害し、女は母を害す」とを引用する。『後漢書』列女傳などに見える孝女曹娥の父である巫祝の肝が、「縣の江の沂に滯婆娑として神を迎えて、溺死し、屍骸を得ず」であったのも「漢安二年五月五日」のことであった。また『左傳』僖公二十四年の條や『史記』趙世家には介子推（「介」綏）が重耳を避けて山中に隠棲した話を載せる。それをたとえば『藝文類聚』卷四「五月五日」に引く『琴操』では、介子綏を探すために文公つまり重耳が山を焼いたところ、子綏は木を抱いたまま焼死したので、文公は五月五日には火を用いないようにさせたとする。この日と結びつけた話がいっ作られたのかは定かではないが、すでに先秦からあったとすると、五月五日は特別の日であったことの一例となる。

(23) 地中海學會編『地中海の曆と祭り』（刀水書房、二〇〇二年）にいう。「十二月二十五日の」降誕祭は復活祭に次いで起源の古い祝日だが、聖書の中ではキリストの誕生の季節を示唆する記述は見られないため、初期の歴史においては一定の日祝われていたわけではない。…降誕祭に關する最古の記述のあるローマの『三五四年の年代記』の中では、殉教者祝日表の十二月二十五日に『ユダヤのベツレヘムにおけるキリストの誕生』、ローマ祭日曆の十二月二十五日に『不滅の太陽の誕生の祭り』と記載されている。これは當時は十二月二十五日がキリスト教と異教の誕生に關わる二重の祝日であったことを示す。古代エジプトやペルシアではユリウス曆で冬至に當たる十二月二十五日を太陽の誕生日として盛大に祝っていた。…ローマでは、太陽を象徴する凱旋車のレースが盛大に催され、二二五年には皇帝アウレリアヌスが十二月二十五日を『不滅の太陽の誕生の祭り』として國の祝日に指定した。そこで、太陽神崇拜の隆盛を憂慮したローマ教會は、キリストの降誕を同じ十二月二十五日に定めた（一五二〜三頁）。

(24) たとえば『初版金枝篇上』（吉川信譯、筑摩書房、二〇〇三年）一一〜八頁、三八七〜九〇頁。

〔附記〕 本稿の一部は、二〇〇一年九月にライデン大學漢學研究院で「The Origin of "Dragon Boat Festival"」と題して話した。その際に意見を寄せてくださった、同研究院のテル・ハール、オリバー・ムーア兩先生に感謝する。また、關係資料の収集にあたって、同僚の毛利晶先生、臺灣大學の佐藤將之先生の援助を得た。併せて謝意を表す。